玄宗皇帝の図書館行政史話

——帝室図書館長の阿倍仲麻呂と、日中の文士人・政客との清交に及ぶ——

（前篇）

児玉孝乃・松見弘道

Ⅰ　はしがき

おおよそのところ、ヨーロッパにおいても例外ではないが、いまここで、中国における書きものの歴史をながめてみるとき、それこそさまざまな要因によって、書物にまつわる管理面で、これまでに被災してきた損失、いわゆる書厄[1]についての事例を回顧すると、もとより規模の大小はともあれ、かぎりはない。

なにしろ、漢字文化圏の王者である中国のばあいは、差し当たって、陳登原が書いた名著『古今典籍聚散考』〔上海　商務印書館　民国21年(1932)〕に管見されるように、漢籍発展の過程は、まさしく書籍集散の繰り返しであった、ともいうべき、筋書きなきドラマを演じてきたのである。

かねて述べられたこと[2]であるが、全滅に瀕（ひん）した書厄を被ると、すぐさま、ときの為政者によって、行政の軌道に乗せられるのは、失地回復のための復興政策であり、収書事業であり、校讎[3]、整備作業であった。

いま拙稿で述べようとする主目標は、初唐から、名にし負う玄宗皇帝の末期にいたる、約1世紀半近くに及ぶ、歴代皇帝の図書館行政の執行ぶりを探ることにある。

ついては、これらの大事業を推進していった主役は、勅命を受けた宰相であり、秘書監であり、諸学者たちであった。だからといって、とにもかくにも千三百年ほども以前のことであるから、確たる史料が集積されているわけでもない。

よって筆者らがこの紙面で開陳する歴程は、なんといっても、1千年前後もまえに書き残した史書に点在する断章的記録を、暗中模索しながら引き当ててきた、素朴なものがたりであることを、了承たまわりたい。

追って拙稿を進めてゆくうちには、もとより、サブタイトルの人物についても、触れなければならない。

すなわち、かねて遣唐使として中国へ渡り、やがて玄宗の信任を受けて、科挙の試験にも合格し、文官の身分で昇進して、遂に秘書監にも任命されて、図書館政策面では、すこぶる貢献した阿倍仲麻呂に説き及ぶことを願っている。

とはいえ、本稿では紙幅のこともあり、かつまた目下、現在における中国人民一般の、仲麻呂に対する人物評価をも吸みとるため、筆者らが親交を得ている中国の同志より、関係資料の提供を仰ぎたいと、かねてから申し入れ、いまやその面の意向を伝える厚意が、若干でも届くのを鶴首しているところである。

Ⅱ　初唐の歴代王朝と、図書館政策

1.　唐代の秘書、秘書監

本章を述べるに当たって、まっさきに触れなければならない事項は、すでに掲げたように、各時代を貫いている歴史的事実——秘書および秘書監のことについてである。

ところで、ひとたび中国史を管見すると、ときの皇帝は、秦漢以来、まさしく軌を一にするがごとく、かたや国の内・外にわたって戦闘に

明け暮れしながら、一方では腹心の宰相、碩学を従えて治世に励み、勅令によって文献の整備事業に力を注いできた史実については、悠久にわたる過去が、はっきりとものがたっている。

そこで、長年にわたる、しかも輻輳した中国の歴史を、端的に分析してみると、まさしく破壊と建設、戦闘と和平、解体と再生、苦悩と光明、やがては伝統と革命という国勢の転変といった、実に止むことのない繰り返しの連続であったともいえる。

こうした波瀾万丈の中国史上にみられる歴代皇帝の行政面に、〝図書館〟というフットライトを照射するとき、必然的に浮上してくるのは、任命権者である天子のために、その手足となって図書館行政を展開してきた側近の国老・諫臣・ないしは秘書監らである。

かれらこそ、実に三千有余年にわたって、秘書・秘閣・府庫・蔵書楼を支えてきた原動力であるといっても、過言ではなかろう。

いまここで筆者らが、こと図書館行政の推進者として特筆大書しなければならないのは、後述するように、厳密にいえば、後漢の桓帝の延熹2年(159)以来、明の太祖の洪武 3年(1370)にいたる、実に延延1,212年にわたり、天子の勅命を受けて、上記した図書館の管理、運営に、中心的存在となって事態を処してきた、歴代の秘書監についてである。

このようにみてくると、以下各代における皇帝が立ち向かってきた図書館政策の、直接の担い手を語るに当たっては、まずもって、秘書・秘書監の起源、意義から解き明かしてゆかねばならないであろう。

差し当たって、今日的に秘書(秘は祕の俗字)といえば、専ら貴人・社長などに直属した、いわゆる(a private) secretary 一辺倒であって、世に使い古されている。

しかし元来、秘書という語は、例えば以下に示すように、中国ではすでに紀元一世紀には出現していた。すなわち機密文書、秘閣の書籍、ないしは隠秘の書(讖緯学[4]に関する書のたぐい)など、さまざまな意味に使われてきた。ちなみに後漢時代の編著から求めても、次のような語句がみられる。

① 王充(27－100前後)撰『論衡、別通』深者入聖室、観秘書。

② 班固(32－92)撰『漢書、敍伝』 遷諫大夫右曹中郎将、與劉向校秘書。

③ 張衡(78－139)撰『西京賦』 匪惟翫好、廼有秘書。

④ 応劭(178前後在世)撰『風俗通義、封禅』其下有玉牒書秘書。

ついては、これらの貴重な秘書を、管理し、運用してゆく官署と、官職は、いかようであったろうか。

早くには宋の范曄(398－445)が撰述した〔『後漢書』巻7 桓帝紀〕の、延熹2年(159) 8月壬午の条に

初置秘書監 漢官儀 秘書監一人、秩六百石

と記録されているが、既述したように、これこそ秘書監という管理職名が、文献に登場した始めであろう。

その後、唐の杜佑(733－812)は、その著〔『通典』職官、諸卿、秘書監〕のなかで

後漢図書在東観、桓帝延熹二年、始置秘書監一人、掌典図書古今文字、考合同異、属太常、後省、魏武帝又置秘書令、典尚書奏事、文帝黄初初、乃置中書令、典尚書奏事、而秘書改令為監、掌芸文図籍之事、……晉武帝以秘書、併入中書省、其秘書著作之局不廃、恵帝永平中、復別置秘書監、併統著作局。

と掲げ、この語句に続いて、玄宗が即位する前年までの、秘書省の管轄内における職官の改革、推移にまで説き及んでいるが、この間の経緯については、ここでは割愛したい。

やがてその後のことになるが、如上の記事を承けて、また宋の沈括(1030－1094)が著わした有名な『夢溪筆談』のなかでも

後漢之時、蔵書東観、在禁中、至桓帝之時、始置秘書監、支配一切秘書、秘書之名始此。

と、同様な解説をしている。

以上で秘書・秘書監の起源、および職掌など

について一応の理解が得られたので、続いて、前掲した『通典』の記事のなかで初唐における秘書省の組織[5]、経緯などについて回顧してみたい。すなわち

大唐武徳初（高祖、618）、復改為監、龍朔二年（高祖、662）、改秘書省為蘭台、改監為太史、少監為侍郎、咸亨初（高祖、670）、復舊、天授初（則天武后、690）、改秘書省為麟台、神龍初（中宗、705）、復舊、掌経籍図書、監国史領著作太史二局、太極元年（睿宗、712）、（玄宗、開元元）、増秘書少監為二員、通判（専念）省事、其後国史、太史分為別曹、而秘書省担主書写勘校而已。（カッコ内筆者）

この叙述のなかでみられるように、高祖より睿宗にいたる約100年にも満たない間に、めまぐるしく官署や職掌名の変更を行うとともに、組織の強化を計っているが、その事由については後述したい。

次に初唐に続く玄宗時代の同上の官署については、〔『唐書』巻47　百官志〕に、実に具体的な記録が残されているので、ここでは原文のみを挙げて、解説は省略する。

秘書省監一人従三品、少監二人従四品上、丞一人従五品上、監掌経籍図書之事、領著作局、少監為之貳。秘書郎三人従六品上、掌四部図籍、以甲乙丙丁為部。皆有三品。……著作局郎二人、従五品上。著作佐郎二人、従六品上。校書郎二人、正九品上。

2．高祖にはじまる

618年5月20日、恭帝から禅譲を受けて帝位に即いた李淵は、王朝名を唐と名のり、年号を武徳と定めた。これが高祖であるが、ちなみに隋の煬帝（ようだい）が楊州において、親衛隊に殺されたのは、この年の3月のことであった。

まずは、高祖の武徳初年には、重複や混在はあったが、蔵書8万巻ていどは保有していた。〔『唐書』巻57　芸文志〕

それよりさき大業13年（617）に洛陽が陥落して、やがて平定するのを待って、図書や古人の筆跡を尽く収集して、金銭や穀物のことを司る司農の次官であった宋遵貴に命じて、これを船に積み込み、黄河を西の方へさかのぼって、まさに首都へ着いた。

しかしながら行くゆく底柱[6]を経るころには、多くは水没してしまった。残りは10中の1～2に過ぎない。その目録もまた水びたしになってしまったが、後述するように、唐の開国に当たり、高祖は、令狐徳棻（れいことくふん）に命じて、隋の遺業を引き継いだのであった。〔『隋書』巻32　経籍志〕

武徳年間の始め、帝室図書館の属官であった令狐徳棻は、39歳のとき、つまり622年に、秘書監（帝室図書館長）に任ぜられたが、李玄感や李密集団の大反乱のあとゆえ、経籍が亡散していた。そこで彼は、遺書を購募するに当たっては、金銭と帛（きぬ）を賞として与え、収書した書籍は楷書で、乱れや誤りを直して、清書すべきである、というむねを奏上した。〔『唐会要』巻35〕

かくして勅令を受けた令狐徳棻は、秘書丞や秘書郎など、専門の属官を任命して、天下各地から購求した遺書を整理させたところ、数年を経ずして、天子の意向にそうことができた。〔『唐書』巻102　令狐徳棻伝〕

追って彼は、乾封元年（666）84歳をもって逝去するまで、次の太宗・高宗にも仕え、後述する梁・陳・周・斉・隋に及ぶ5代史の官撰事業を推進して、そのうち『周書』は、責任者であった。よって累進して、弘文館学士から国子祭酒（英才学校の長官）まで昇り、文集30巻も著している。

武徳7年（624）9月17日には、侍従役ともいうべき給事中の欧陽詢[7]は、『芸文類従』[8]100巻を編集して、これを献上した。〔『唐会要』巻36〕

その翌々年の3月には、修士館を宏文館と改めた。〔『唐会要』巻64〕

同年6月4日、長安宮城の北門に当たる玄武門附近で、高祖の次子・李世民が、皇太子である兄の李建成[9]、および弟の斉王李元吉を殺害するという、玄武門の変が起こった。思うに高祖の治世9年間は、兵乱やむことなく、群雄が割拠して、いわゆる短命な時代であったが、即位5年めにして果たした図書館の整備事業のみは、史書にも特筆されている。

3．太宗の貢献

かくして626年6月7日、太子に立てられ、8月父の高祖から譲られて即位したのは、太宗である。その治世は年号をもって〝貞観の治〟（じょうがんのち）と呼ばれて、太平の世の模範とされたが、それほどの名君であった。

太宗は即位するや、宏文殿において、四部にわたる群書20余万巻を収集し、御殿のそばの宏文館に置いた。そしてのち中書令（宰相）も勤め、また書道の大家でもあった褚遂良[10]に勅令を下して、宏文館の業務を監督するように取り計らって、館主と名付けた。〔『唐会要』巻64〕

魏徴といえば諫臣として、高祖のとき秘書丞となり、やがて太宗に仕え、門下省の長官たる検校侍中に進み、前掲の玄武門の変で活躍した人物であるが、一方『羣書治要』や『隋書』をはじめ、多くの奉勅撰による史書を編集している。さらに、さきに述べた令狐徳棻や孔穎達[11]らが撰した『周書』の改訂も、勅命を受けて完成した。

孔穎達
（三才図会）

虞世南
（三才図会）

欧陽脩
（三才図会）

顔師古
（三才図会）

628年には、秘書監に任ぜられて、帝室図書館の整備に努めている。なにしろ戦乱後のことであるから、いちじるしく典章（制度）が紊乱してしまっているので、よろしく学者を召集し、群書の校定に当たらせるよう、奏上したのであった。〔『唐会要』巻35〕〔『唐書』巻97　魏徴伝〕

別に校讎の専門家20人、書写生100人を置くようにした。魏徴が図書館長の大役を定年退職すると、太宗はときの碩学であった虞世南[12]と顔師古[13]に命じて、この大事業を実行させた。〔『唐書』巻97　魏徴伝〕

いまここにみられる、太宗に仕えた3名の秘書監の業績について、編集者の欧陽脩らは、〔『唐書』巻57　芸文志第47〕のなかで、端的に、手短に記録しているので、部分を原文で掲げると

> 貞観中魏徴、虞世南、顔師古、継為秘書監、請購天下書、選五品以上子孫工書者、為書手繕写、蔵於内庫、以宮人掌之。

と。

つまり3代にわたる帝室図書館長らは、それぞれに、天下各地へ専門家を派遣して、隠れた遺書を採訪させ、そのうち借用した書籍については、五品以上の官職にある血筋の者で、とりわけ書の道にたくみな子弟を選考し、手づから、かれらに書写させて、できあがった果実は、宮廷文庫に収納して、女官たちに管理させたのであった。

ちなみに、こうした管理面を女官に任せたことで、その後、いはば弊害が生じてきたきらいがある。この間の事情については、あとの記事にゆずりたい。

それがため数年間は、秘府（宮廷文庫）は、燦然と輝やくほど、いやがうえにも整備されていた。〔『唐会要』巻35〕

それにつけても貞観の初年には、飢饉や虫害や洪水といった天災異変が襲ったが、やがて〝貞観の治〟と呼びならわされるほどの、太平の世を迎えると、まさしく、東アジアの帝王学教科書であるとも称される『貞観政要』10巻の名著が、呉兢[14]の手によって、こうした土壌

から誕生したといってもよい。

もとよりこの著作の古写本は、平安朝時代には早くも我が国へ伝わり、鎌倉、江戸の武家政権のもとでも、愛読書に数えられていたほどである。

いうまでもなく貞観は、太宗の年号である。その治世が、〝貞観の治〟とたたえられたのも、あながち、力の政治に走らず、徳の為政を志向して、しかもそれが成功したからにほかならない。そこに太宗その人の卓越した素質があり、そのうえこの書物に登場している群臣たちや、はたまた後世からも、実に名君であるとあがめられ、信頼と支持を得た人物であった。

ついては、この貞観5年（631）には、太宗の勅命を受けて仏典の整備に当たっていた釈玄琬（げんえん）は、〝衆経目録〟を完成して、献上することができた。〔元　釈覚岸撰『釈氏稽古略』〕

さらに10月25日には、勅を奉じていた申国公ら群臣たちは、『文思博要』凡そ1,200巻を完成して、これを上奏した。〔『唐会要』巻36〕

4．高宗のばあい

如上のほかにも、太宗の気くばりで編集された史書は多いが、他方では、図書館の整備にも怠りなかったので、あまねく称揚された英主であった。

しかしながら諸行は無常、貞観23年（649）に他界してしまったが、かくして太宗14子のうちの、第9子が即位した。第3代の、21歳で帝位に即いた青年皇帝、高宗である。

思うに名君のほまれ高かった太宗も、前述のように、玄武門の変の張本人で、もとより道徳的、倫理的には、許さるべき行為ではなかった。

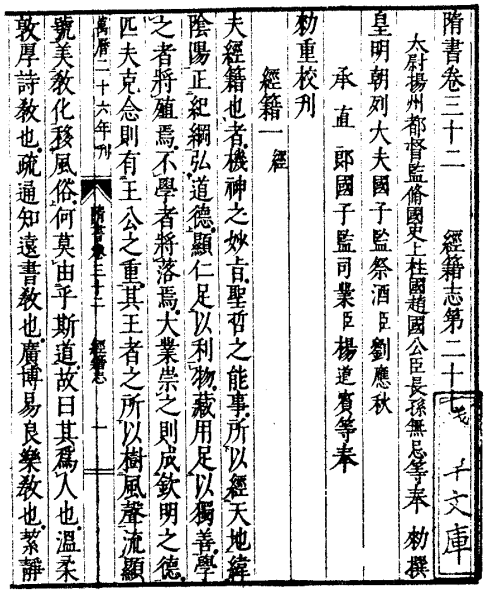
さてこの太宗が、23年5月危篤に陥ったとき、孝養の限りを尽して臨終を見守ってくれたのが、太子治（たいしち）であった。

しかも、太宗は妻（皇后）の兄である長孫無忌と、同じく宰相であった褚遂良に、寵愛（ちょうあい）する太子のことも含めて、後事を託して息を引きとったのであった。

かくして即位したのが太子治であるが、してみると長孫無忌は、高宗にとっては伯父であり、一方では文史に通暁した碩学でもあった。しかし晩年には、無実の罪で殺害される身であるが、勅命を受けて、それこそ在世中は、『太宗実録』『貞観実録』を始めとする、膨大な国史の監修に、主編者として携わるのみか、『五経正義』の校訂を完成したのは、653年のことであった。

さらにまた、魏徵らが勅を奉じて撰述した『隋書』85巻のうち、本紀・列伝は顔師古・孔穎達（前掲）の修述であったが、〝志〟の分野を完成して表進したのは長孫無忌であり、高宗即位7年めの、656年のことであった。〔『唐会要』巻63〕〔『唐書』巻105　長孫無忌伝〕

後には『隋書』に編入されて、『隋書経籍志』略して『隋志』と称しているが、その経籍志に現存している書籍を考慮すると、四部に分類していて、合して14,466部、89,666巻あった。〔『隋書』巻32　経籍志〕


隋書卷三十二　經籍志第二十七　千文庫
太尉揚州都督監脩國史上柱國趙國公臣長孫無忌等奉　勅撰
皇明朝列大夫國子監祭酒臣劉應秋
承直郎國子監司業臣楊道賓等奉
勅重校刊
經籍一　經
夫經籍也者機神之妙旨聖哲之能事所以經天地緯
陰陽正紀綱弘道德顯仁足以利物藏用足以獨善學
之者將蓋焉不學者將落焉大業崇之則成欽明之德
匹夫克念則有王公之重其王者之所以樹風聲流顯
號美教化移風俗何莫由乎斯道故曰其爲人也溫柔
敦厚詩教也疏通知遠書教也廣博易良樂教也絜靜
隋書卷三十二　經籍志　一
萬曆二十六年刊

隋書経籍志
（和刻・影印・汲古本）

龍朔2年（662）2月4日、高宗は秘書省を改めて蘭台と名づけ、その監督者を蘭台太史（長官）とし、少監（次官）を蘭台侍郎と称し、丞（属官）を蘭台大夫と改称した。〔『唐会要』巻65〕

〔『唐書』百官志〕

高宗はまた、乾封元年（666）10月14日、四部の群書を書写してゆくうえに生じてきた誤謬（ごびゅう）を訂正し、欠本を補足して、そのうえ門下省の次官である東台舎人の張文瓘（ぶんかん）、秘書少監の崔行功、蘭台の次官であった李懐儼（かいげん）らに詔勅を下して、それぞれ調査し、検討させ、一方では詳正学士（司書）を置いて、当面の校讎、整理に当たらせた。整理が終ったところで、繕写させた。〔『唐書』巻113　張文瓘伝、巻201　崔行功伝〕

高宗は在位34年と、比較的長い治世であったが、こうした晩年の咸亨元年（670）10月23日、またまた蘭台を改めて秘書省と称し、6年後には、宏文館には書籍も多いので、詳正学士（司書）を任命して、整理に当たらせた。〔『唐会要』巻64、巻65〕

5．中宗の図書館事業

683年、55歳で他界した高宗の第7子が即位して、唐代・第4代の中宗が継いだ。しかし帝位にあることわずか54日で廃位され、専権者武后は、その翌年にはすぐさま、秘書省を改めて、麟台とした。〔『唐会要』巻65〕

701年11月12日には、武后の詔勅を奉じて、麟台監の張昌宗等は、『三教珠英』1,300巻を編集して、中宗に表進した。〔『唐会要』巻36〕〔『唐書』巻104　張昌宗伝〕

その4年後の10月19日には、宏文館を改めて、昭文館とし〔『唐会要』巻64〕、また麟台を改めて、秘書省に復帰した。〔『唐会要』巻65〕そしてまたその翌年には、昭文館を改めて、修文館と名称を変えた。〔『唐会要』巻64〕

武后が死去し、中宗が復位して、唐が復活した3年後の708年4月22日のこと、修文館では大学士4名、学士8名、直学士12名を増員し、文学を専攻する人士を徴収して、その運用に当たらせた。〔『唐会要』巻64〕

ところがその翌年、つまり中宗が韋皇后に毒殺され、睿宗が即位するその前年の6月、天下に詔勅を下して、図籍の収集に努めるようにした。〔『玉海』巻43〕

高宗の第8子、中宗の弟である睿宗が即位するや、その翌年（711）に、再び修文館を改めて、昭文館に戻した。〔『唐会要』巻64〕

さてこのように眺めてくると、先ずは高宗から、中宗、則天武后、睿宗にいたる、わずか60年ばかりの間に、宮廷図書館の名称も、蘭台、秘書省、麟台、宏文館、昭文館、修文館などと、帝位に即くや、すぐさま改称するばかりでなく、一方では、旧名に復帰するさまが読みとれた。またそれだけに、人心の刷新をはかるとともに、即位した皇帝はそのつど、経籍の採訪、収集、校讎、整理、目録の編集、そして提供することなど、厳しい時代的背景にもかかわらず、いまにして思えば、皇帝みずから、実に眼を見張る政策をはかってきている歴程に気づかされる。

こうしたありさまを、史書をたどりながら、さらに玄宗時代へと駒を進めて、主として秘書監をめぐる帝室図書館の整備事業を、続いて探ってみたいと思う。

Ⅲ　玄宗の図書館行政

1．はじめに

玄　宗
（三才図会）

一般に唐代といえば、ただちに、玄宗と楊貴妃とのラブ・ロマンスが想起されるほど、あまりにも著名な話題が残っている。ともあれ、あたかも玄宗が君臨した盛唐の時代は、中国の国運が、政治的にも外交的にも、文化の面でも、至極栄えた時代であることは、いつわりなく、

ときの年号から、世に〝開元の治〟と称されていることは、周知のとおりである。

さて玄宗は、『旧唐書』の玄宗紀にも、性は英断にして多芸、ことに音律に通じ、八分（書体の一種）の書を善くし、儀範（行為）は偉麗（すぐれてうるわしい）にして、非常の表（たちいふるまい）あり、と記録されているごとく、粋な面でも、歴代皇帝のなかでは、一頭地を抜きんでていた。

ところが一方では、この玄宗が寵愛した武恵妃の子である寿王瑁の妃で、いわゆる西ではクレオパトラ、東では楊貴妃とも称して、世界美人の双璧とされていた、そのひとりを、自分の妃にしたのは、740年10月、玄宗56歳、貴妃22歳のときであるといわれている。

この絶世無双の美人をともなって、海抜1,256メートルの驪山の山麓にある温泉宮で、新婚の拝謁がなされた。かくしてここに、ひたすら愛情に溺れ、〔『唐書』巻5　本紀〕にも見られるとおり、その後においても温泉への行幸は、日とともに激しさを増していった。

ところがやがて大唐帝国を、破局の寸前まで転落させたにもかかわらず、例えば白楽天の『長恨歌』にも美化されて詠まれているのは、玄宗の人徳によるというほかない。

ちなみにこの詩は、七言、120句、840字の、いわゆる長篇の〝長くせつない恋心〟を歌いあげた、いってみればわが国、平安朝の文学にも、大きな影響を与えている代表作として知られる。

そのうち、２人のロマンスのクライマックスともいわれる、温泉宮（747年に華清宮と改められ、現在も観光地として有名）のひとこまを、私訳とともに掲げて、鑑賞してみたい。

春寒賜浴　華清池
　　春まだ浅き　華清宮
　　湯あみのことばを　たまわった
温泉水滑　洗凝脂
　　温泉の湯は　まろやかで
　　ぽってりしまった　玉はだにそそぐ
侍児扶起　嬌無力
　　こしもとささえて　かかえあげても
　　まだぐんなりと　ちからなく
始是新承　恩沢時
　　このときはじめて　天子から
　　こよなく愛を　受け入れた

この詩でも代表されるように、それこそ、まさしく、イランむすめのホステスが臭う、美人酒場があふれ、人口百万余を擁した世界最大の都市、長安を舞台にして、貴族たちのあいだでも、豪奢、絢爛にして、華麗な生活が繰り広げられていた。

こうした背景を控えて、前後に比類ないほどの作詩活動が栄えた玄宗の治世は、他方では、絵画史にも、山水画という新しいジャンルが切り開かれ、さらには顔真卿[15]を中心とする書道の面でも、もっとも華やかな局面が展開された。

顔真卿
（三才図会）

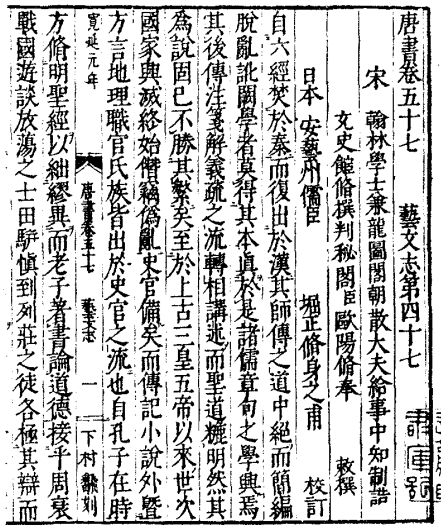
しかも他面、この時代には、社会経済は安定し、文化の発展をうながすこととなり、読書人口は増加するし、またそれだけに、書物に対する需要度も、日増しに高まってきたわけである。

同時に、600余年にわたる経験の過程を経てきたがため、製紙の技術も熟練して、写本の全盛時代を醸し、書籍の装丁法も改進してきた。従って、著作物も多くなる一方、蔵書家の誕生を促すことになった。

あたかも、ここにみられる実社会を察するに敏であった玄宗は、古籍や新刊書を問わず、その採訪、収集、整備のため、侍臣を動員して、

行政の軌道に乗せてきたのである。

さてここで筆者らは、千二百数十年をさかのぼって、まさにこんにちに残る、〔『唐書』巻57芸文志第47〕にみられる、なまなましい記事を探訪してみよう。


唐書卷五十七　藝文志第四十七
宋　翰林學士兼龍圖閣朝散大夫給事中知制誥
文史館脩撰判秘閣臣歐陽脩奉　敕撰
日本　安藝州儒臣　堀正脩身之甫　校訂
自六經焚於秦而復出於漢其師傳之道中絶而簡編
脫亂訛闕學者莫得其本眞於是諸儒章句之學興焉
其後傳注箋解義疏之流轉相講述而聖道纔明然其
爲說固已不勝其繁矣至於上古三皇五帝以來世次
國家興滅終始僧竊爲亂史官備矣而傳記小說外暨
方言地理職官氏族皆出於史官之流也自孔子在時
寛延元年　唐書卷五十七　藝文志　一　下村繁刻
方脩明聖經以紬繆異而老子著書論道德接于周衰
戰國遊談放蕩之士田駢慎到列莊之徒各極其辯而

唐書芸文志(和刻・影印・汲古本)

まずは別項で述べるように、近衛官として天子に近侍し、門下省に属した左散騎常侍で、昭文館学士でもあった馬懐素や、中書省に属した右散騎常侍で、崇文館学士の褚無量らには、玄宗としては、貞観の故事[16]や民間の異本を借りて、書写するための用品について、なみなみならぬ気くばりをしている。すなわち原文を挙げれば

太府、月給蜀郡麻紙五千番、季給上谷墨三百三十六丸、歳給河間、景城、清河、博平、四郡兎千五百皮、為筆材。

この短文からうかがわれることは、風流皇帝玄宗は、当時の大書家たちが愛玩(あいがん)したであろう良紙、名墨、名筆を万難を排し、使者を走らせて購求させ、あるいは当該各地から献上させて、当事者に当てがったのである。

著名な記事であるから、鑑賞してみたい。

つまり、太府(朝廷の府庫、すなわち国費)を使って毎月のこと、原料の麻が豊富であった蜀郡(四川省雅安県)の麻紙を五千番(張または枚)も供給し、四季おりおりに上谷郡(河北省易県)で産する松煤で作った名墨を336丸(丸い形の墨・墨丸)、そして毎年、河間(河北省献県)、景城(河北省交河県)、清河(河北省清河県)、博平(山東省聊城県)の四郡に産する兎(うさぎ)、1,500匹分の、毛の付いたままの皮を、筆の材料として下附した、という趣旨が述べられている。

こうした実状を、以下項を改めて、断章的ではあるが、あくまで秘書監の貢献ぶりを基調にして、素朴であり、短絡的ながら、当時としては、実に世界に冠たる図書館政策の断面であるとの見解をもって、中国における図書館史の一ページを埋めてみたい。

2．秘書監としての馬懐素の業績

玄宗の腹臣であった馬懐素が、秘書監を拝命したのは、開元5年(717)、かれ59歳のときであるが、それより早く、帝の側近にはべり、帝室文庫の整備には、並みいる専門官や学者を指揮して、その任に当たっていた。

かれは〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕によると、ときの碩学であった李善[17]に師事したが、家が貧窮のため、昼は木こりとなり、夜はもっぱら読書に励んだため、よく経史に通じて、進士にも抜擢(ばってき)された俊秀であった。

門下省に属して、天子の車に陪乗した近衛官ともいうべき左散騎常侍であった開元3年(715)に、ある宴席で、褚無量とともに玄宗の側に侍ったおり、古代から秘府に所蔵している書籍のことについて、真剣に奏上した。つまり

宮廷内の図書には、一般に先帝の太宗、高宗のころから伝えられた、いわば前代の遺書で、しかも常に宮中の女官に命令して整理させていたきらいがみえる。それがため欠本が多いにもかかわらず、いまだに補充されていない。乱丁も甚だしいので、閲覧が困難である。どうぞや、一日も早く整備されたい、と。〔『唐会要』巻35〕

また同じ年に献言していわく

願わくは、詔勅の草案を作成する中書省と、天子に文書を取り次ぐ中納言に勅命して、偉大な儒学者たちを召集したうえで、誤謬(ごびゅう)を校正されたい、と。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

ちなみにまたその翌々年(717)のこと、次号に紹介する予定の阿部仲麻呂が、遣唐使となって日本を出発し、目的地である長安に到着したのは、9月のことであった。

それにつけても、馬懐素はまた、この年の12月、中国図書館史上に残る有名な上奏をした。すなわち

南斉以前の墳籍（書籍）は、元来、王倹の『七志』[18]によって整備している。ところが、以後の著述も多く所蔵していながら、『隋志』に掲載されている書籍が、そろっていない。近ごろでは古籍も出まわっているから、すべからく前人の書き残した貴重本を採訪して、『七志』に基づいて整理したうえで、宮中の秘府へ収納されたい、と。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

このように専門的な真意のある進言を受けた玄宗は、認可するや、すぐさま馬懐素に対して秘書監（帝室図書館長）の発令をしたうえで、国子博士（大学の教授）の尹知章[19]を委員長に任命して、一大事業を完成するように、詔勅を下した。

よって後には建設大臣にまで進んだが、優れた史学者で、『西都雑記』と『両京新記』（残巻）などの名著を著わしている韋述[20]や、後述する著名な学者の母煚[21]ら、36余名の英才によって、懐素の指導で、分類、整理され、総目録が作られた。そのうえ懐素は、皇帝に奏上して、秘書少監の盧俌崔沔を図書副使（次官）に、秘書郎の田可封[22]と康子元[23]を判官（属官）に、それぞれ任命して、組織強化を計った。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

3．褚無量をめぐって

馬懐素とともに玄宗の近衛官を勤め、秘書省に属して、皇帝の図書館政策にも大役をおおせつかって、さすがに眼を見張る業績を残している。

開元5年（717）のこと、あたかも英才学校の長官でもあった、国子祭酒を兼ねている褚無量は、帝に献言するに当たって、高宗のときから所蔵している宮廷文庫の図書は、分類が乱雑で、排架も乱れている。なにとぞ欠本は補充し、分類も整備して、書籍が活用されるように取り計らってほしい、と上申した。

そこで皇帝は、整備した書籍を、東都の乾元殿の東側にある、わきの部屋へ集めて、排架した。〔『唐書』巻200　褚無量伝〕

それがため褚無量はさらに書架を増設し、一定の順序に従って排架するとともに、前代から伝わる民間の貴重本を捜し集め、書き写したうえで、所蔵者に返却するようにした。さらになお文書で、盧僎[24]をはじめ、陸去泰[25]、徐楚璧[26]らの学者を召集して、校讎の事業を行なわせるとともに、分類順に排架した。

差し当たって天子の護衛官役の衛尉が順序を決め、宮中の顧問官である光祿が、食事の供給を担当した。

また秘書省、司経局、および昭文、崇文の二館に詔勅を下して、このうえとも、互いに調査したうえで、校訂し合うようにさせた。他面では、天下各地へ学者を派遣して、かくれた遺書を収集し、欠本を補充する政策を講じた。

さらにまた褚無量は上申した。すなわち、貞観時代の天子の御書には、宰相（総理大臣）が末尾に署名している。ところが臣下の地位は低くて、いかにもかたじけないので、願わくは天子も、宰相と連名で、跋尾に署名していただきたいものである、と。

それにもかかわらず、帝は、がえんじなかった。〔『唐書』巻200　褚無量伝〕

ひるがえってその翌年、つまり開元6年（718）の7月、褚無量とともに玄宗に仕えてきた馬懐素は、行年60歳を一期に、他界してしまった。するとすぐさま皇帝は、秘書監と同時に、修書学士にも詔書を下して、四部の書籍の校訂を行わせた。ところが、人びとはそれぞれ勝手気ままに作業をしたがため、統制がとれていないので、一年を過ぎても完成しなかった。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

そこで帝は、秘書丞、つまり館長補佐の殷承業[27]をはじめ、側近の、それぞれの専門官である魏哲、陸元悌、劉懐信、胡覆虚らには、特に勅命して、乾元殿における整理事業に没頭させた。〔『唐会要』巻64〕

かくして8月14日には、四部の書籍の整理が完成したので、もろもろの官吏に勅命して、乾元殿の東にある書楼の蔵書を見学させたところが、よろこび、また驚かないものはなかった。

〔『玉海』巻52〕〔『唐書』巻200　褚無量伝〕

それほどの貢献ぶりに対して、黙して済ます玄宗ではなかった。つまり賞として、〝賜無量等帛有差〟、すなわち褚無量らには、縑帛をたまわって、差違をつけたのである。

つづいて皇帝は、書籍を麗正殿に移しかえて、さらに修書学士を麗正殿の直学士に任命し、京師に在勤する役人には、朝廷の儀式に参列することを許すようにした。また詔勅によって褚無量は、麗正殿で遂行してきた以前からの職務を、今後も受けつぐことになった〔『唐書』巻200　褚無量伝〕

馬懐素が逝去した翌年（719）7月、麗正殿において、王倹の『七志』に基づいて、蔵書の整理をする職務を命ぜられたのは、王毛仲[28]であった。ときに車馬、および牧畜のことを司っていた太僕卿の毛仲は、それにもかかわらず、年を越しても成就しなかったため、司書官たちは疲れて、おろおろしていた。そこで帝は、側近の近衛官であった褚無量、およびときの司法長官であった大理卿の元行沖に勅命を下して、かれを追放してしまった。

そのこともあって、褚無量らは奏上した。つまり、史書を修撰（編集）するには、条理（すじみち）がある。ぜひとも大儒学者たちを召集して、統治（すべおさめる）すべきである、と。

このようないきさつで、玄宗帝は、元行沖に勅命して、万全の整備をするように、委任したのであった。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

4．元行沖の役目

〔『唐書』巻200〕に掲げている列伝に見られるように、行沖は字をもって知られるが、名は澹。幼年時代は、外祖（母の両親）である司農卿（外務大臣）であった韋機に養われていたが、長ずるに及んで博学となり、とりわけ故訓（むかしのおしえ）に通暁して、進士にも及第した。

ついては前述した玄宗の側近に侍って、帝室の図書館長、ないしは次官的官職として、また優れた学者としても、玄宗に親任されてきた馬懐素、および褚無量と、ここに紹介する元行沖との接点をうかがうに足る、前掲した『唐書』にみられる元行沖の伝記を掲げると

> 大理卿（行沖）不楽法家、固謝所居官、改左散騎常侍、封常山縣公、充使倹校集賢。再遷太子賓客弘文館学士。先是馬懐素譔書志、褚無量校麗正四部書。業未卒相次物故。詔行沖并代之。玄宗自註孝経、詔行沖為疏、立于学宮、以老罷麗正校書事。

と、書き残されている。

ところが、思うに開元6年（718）7月には、馬懐素が60歳にて病卒し、こんどまた、その2年後の正月には、褚無量が75歳をもって帰らぬ人となってしまった。

さてこのように、玄宗にとってみれば、わずか2年の間に、側近の両巨頭に逝かれてしまっては、どうしても、まず元行沖に頼らねばならなくなった。ついては、懐素が逝去した翌年であったが、元行沖は玄宗の勅命を受けて、古今に通ずる書目の編集を完成し、ひとまず『羣書四録』と名づけた。〔『唐書』巻200　元行沖伝〕

この目録を編集するまでの過程においては、それぞれ秘書省の学士である殷践猷[29]と王愜[30]は経部を、河南省櫟陽の軍尉官でもあった韋述と、大学の助教授の余欽は史部を、陝西省鄠県の軍官であった母煚と劉彦直[31]は子部を、王湾[32]と劉仲丘[33]は集部を担当したのであった。〔『唐書』巻199　母煚伝〕

同じくこの年の9月に、さらにまた元行沖に勅命が下った。というのは、近来、書籍は欠乏し、そのうえ錯乱していることが多く、概してその書籍の来歴も不明で、大綱は失錯してしまっている、という趣旨である。

そこでまた麗正殿に勅令して、四庫の書物を書写させ、各々本庫において、四部それぞれに目録を作らせた。なかでも四庫の書籍で分類し難いものは、劉歆の『七略』[34]によって整理し、排架は、王倹の『七志』に基づくようにした。

そのうえ、経・史・子・集および人文集は、著作物の時代によって前後を決定し、著者の品帙（くらいと俸禄）によっても順序を決めるようにした。そのうち『三教珠英』は、すでに欠落があるので、よろしく旧来の目録によって、文章の補修をするように命じた。

なお、この9月4日には、旧来の昭文館を、弘文館と改称した。〔『唐会要』巻35、64〕

12月4日からは、弘文館と崇文館との2館に、校讎を専門とする属官を置いて、組織の強化を計った。〔『唐書』巻5　本紀〕

ところが褚無量は、前述したように、開元8年に故人となったが、臨終に際して、麗正殿における書写の事業が未完成であることを後悔し、残念に思いながら、75歳を一期としたのであった。

そこで玄宗は、あたかも英才学校の長官である国子祭酒の元行沖に、褚無量が遺言で心残りに思っていた麗正殿の蔵書を整備するように勅命した。

よって前掲した母煚、韋述、王湾、余欽を始め、秘書省の校書官である孟曉や、軍事顧問官である韓覃ら、当代の名立たる側近や、専門の学者を動員して、麗正殿の書籍の校讎を決行するようにした。

それがため、秘書省における撰輯（編集）の事業は、ひとまず中止して、学士たちはみな、こぞって麗正殿で作業をするように、取り計らった。〔『唐書』巻199　母煚伝〕

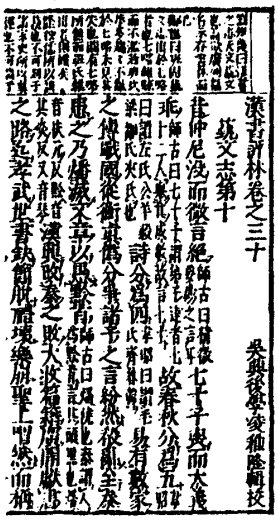
このような、絶大にして強固な組織によって、玄宗が企図した大事業を成し遂げて、さきごろ編集したばかりの『羣書四部録』200巻を、ねんごろに重修して、大命を帯びた元行沖が、ここに晴れて皇帝に奏上することができたのは、褚無量が心にかけながら他界した、約2年後の、開元9年（721）の、11月13日であった。〔『唐書』巻57　芸文志第47〕

できあがった目録は、凡そ2,655部、48,169巻であって、経・史・子・集の四部に分類し、その序列は、蔵書2万巻を所有する、ときの大学者であった韋述が代表して撰述した。〔『唐会要』巻36〕

よって献上された玄宗は、至極これを嘉美（ほめたたえる）して、その成果は、すべて内府（宮中の書庫）に収蔵した。〔『唐書』巻5　玄宗本紀〕

しかしながら懸命に貢献した学士のなかにも、賞擢（人物をほめて、抜擢して用いる）の恩典に浴することができなかった人物が、あらわれてきた。〔『唐書』巻199　馬懐素伝〕

ところがその後、母煚は、さきに編集した目録が、極めて不満であったので、ずいぶん後悔したあげく、苦心のはて、さらに『漢書芸文志』[35]の体例（様式）にならって、それぞれの部門に小序をつけ、別に『古今書録』40巻を完成した。つまるところ、すべて45家、おおむね、3,060部、51,852巻にわたっている。


漢書芸文志（和刻・影印・汲古本）

さらに母煚の業績として挙げられるものには、そのほかに、釈氏関係の経律論疏[36]、および道家の経戒符籙[37]関係の編著がある。総じて2,500余部、9,500余巻がみられるが、またつぶさに、その編著である印度の名氏を漢訳して載せ、指帰（根本思想）を叙述したうえで、さらに目録10巻を収録して、『開元内外経録』と名づけた編著もある。〔『唐書芸文志』　引母煚自序〕

5．徐堅と、その周辺

かれは、〔『唐書』巻199〕所載の列伝によると、

> 為絳州刺史、数外生久、乃遷秘書監左散騎常侍、玄宗改麗正書院、以堅充学士、副張説、知院事。

と記録されているごとく、玄宗時代には進士に挙げられ、山西省翼城県南の、絳州の刺史（長官）を経て、秘書監に任ぜられている。典礼、故実にくわしく、文章が巧みで、玄宗の勅命によって編集した『初学記』30巻は、唐代の著名な類書として、いまも伝えられている。

開元10年（722）の春、麗正修書院は、明福門の外にある中書省の北へ移された。この年の9月のこと、文集はじめ多くの著書を残している張説[38]は、あたかも麗正殿で書籍の撰修を行なうことを知って、秘書監の徐堅を副委員長に委嘱し、儒学者の張悱を使わせて、天下各地へ、

遺書を採訪するために派遣した。〔『唐書』巻125　張説伝〕

また玄宗は、13年（725）4月には、集仙殿を改めて集賢殿とし、麗正殿書院を集賢殿書院と改称している。〔『唐書』巻5　玄宗本紀〕

改名したうえで、さきの中書省の長官である張説を学士に当て、院事の職務を司らせ、近衛官である散騎常侍の除堅を次官に任命し、ときの直学士や、天子と皇太子の侍講学士であった賀知章を始め、趙冬曦（ちょうとうぎ）、韋述、母煚（ぶけい）ら、10余名にも、その仕事に当たらせた。〔『唐会要』巻64〕〔『唐書』巻199　徐堅伝，巻200　趙冬曦伝〕

さらにまた、18年（730）には、仏典の整備・目録の編集が盛んになんてきた。[39] 勅命を受けて委員長を奉じた釈智昇を中心に、『大唐開元釈教録』20巻、『開元釈教録略出』4巻、『続古今訳経図記』1巻、『続集古今仏道論衡』1巻、『続大唐内典録』1巻などを編集している。〔『大蔵』〕

ときの史書〔『唐書』巻5〕〔『唐会要』巻35〕などが伝える集賢院の四庫が収蔵していた書籍は、すべて89,000巻（80,080の誤り）、すなわち経庫が13,752巻、史庫が26,820巻、子庫が21,548巻、集庫が17,960巻であった。

そのなかには、梁・陳・斉・周、および隋代の古書、ならびに貞観・永徽・乾封・総章・咸亨の各年代に、それぞれ勅を奉じて繕写した書籍も含まれている。〔『唐会要』巻35〕

それから有為転変して13年後、天宝3年（744）といえば、玄宗が楊貴妃を迎えて3年め、60歳のときに当たる。その3月現在の四庫の在庫目録が、6月に完成した。掲載されている在庫の蔵書数は、経庫が7,777巻、史庫が14,859巻、子庫が16,287巻、集庫が15,720巻、総数54,643巻に過ぎなかった。〔『唐会要』巻35〕

さらには5年後の天宝8年に、唐代でも著名な史家の一人、呉兢（ごきょう）が、80歳で他界した。なにしろかれは、古都・開封の生れで、天宝の初年には、鄴郡の太守（長官）にも進んだが、一方では、『斉史』をはじめとする五代史や、『中宗実録』『貞観政要』などの編集陣容にも加わっている。よって収書した蔵書もすこぶる多く、かねて『呉氏西斎書目』なる家蔵書目録を備えているほどであった。〔『唐書』巻132　呉兢伝〕

天宝11年（752）6月24日、玄宗は秘書監の李成裕に勅命して、四庫の書籍を整備したうえで、まずはつぶさに、その結果を奏聞させた。〔『玉海』巻52　引集賢注記〕〔『唐書』巻150　李成裕伝〕

同年10月には、秘書省に勅して、四庫の図書を再度点検させて、集賢院と打ち合わせながら、欠本の部分を書写して、補充するように命じた。〔『唐会要』巻35〕〔『唐書』巻150　李成裕伝〕

上記のように、天宝3年から14年まで、11年間にわたって続行してきた、帝室図書館の書籍を補写し、整備する事業を進めてきた結果、その蔵書も、16,843巻に達した。〔『唐会要』巻35〕

実はこの年、名声著しい玄宗も、安禄山の反乱にあって、すでに四川省成都へ亡命してしまった。

つまるところ本稿では、これまで述べてきたように、一千年前後も以前に記録された史書のなかから、素朴ながらも史話として紹介し、前篇を終りたい。

追って本稿のサブ・タイトルに掲げた阿部仲麻呂は、717年に遣唐使として中国へ渡り、若くして俊英で文史の道へ進み、やがて玄宗に抜擢（ばってき）されて、秘書監となり、図書館行政に偉大な貢献を果たしてきた。

その間、唐代の大詩人であった李白を始め、王維、儲光羲（ちょこうぎ）、包佶（ほうきつ）、杜甫らの文人、墨客と交わって、数奇の運命をたどった。

一方では、日本から留学生として同行した吉備真備（きびのまきび）や、留学僧の玄昉（げんぼう）とは、かれらが帰国して、要職についてからも、友情あふれる交流が続いて、まさしく、事実は小説よりも奇なりというべき、かれ仲麻呂にとっては、実にみのり多き人生の最後を、異国の首都長安で、在唐53年、75歳をもって全うしたのであった。ときに、大暦5年（770）正月のことである。

しかしながら、こうした不可思議なシナリオについては、後篇にゆずることとした。

注・文献

1）猛省を促したい日本軍閥による、書厄の、２例を挙げる。

① 1932年２月１日の第１次上海事変で、日本軍の砲撃を受けて、上海商務印書館に附設する、由緒ある東方図書館が所蔵していた、学徒垂涎（すいえん）の膨大な稀覯（きこう）書は、同館専属の、中国最大規模といわれた編集総局や、印刷工場などもろとも、ひとたまりもなく烏有に帰してしまった惨事は、われら日本人として忘れてはならない。

〔参照〕 松見弘道 児玉孝乃；『間宮不二雄大人と、中国図書館人との交流』 短期大学図書館研究 第４号（1983）ＰＰ．１～12

② 満州侵略史の一駒（こま）であるが、①と同年の３月より５か月間に、瀋陽の小北門里にあった学生書房の経営者は、日本軍により逮捕され、約２万冊の図書を焼き尽くしてしまった。なにしろ瀋陽だけでも、650万冊以上もの過酷な焚書を断行した事実がみられる。

〔参照〕

ａ．本田勝一；『中国の旅』 朝日新聞社（1979）ＰＰ．34－35

ｂ．松見弘道；『中国における図書館事業の萌芽と、秦漢皇帝の功科』 東海女子短期大学紀要 第８号（1982）Ｐ．95 注）６

2）隋の煬帝（ようだい）の秘書監であった牛弘は、書厄の原因を５厄に分析している。いま挙げた陳登原は、牛弘とは別の視点から、４つの局面があることを指摘している。

いずれにせよ、これら書厄のばあいにみられる、想像を絶するばかりの歴史的事件については、次の文献で詳しく回顧している。

松見弘道；『図書館と漢籍――図書・図書館のルーツを探る－』 明星大学出版部（1989）ＰＰ．265－290

3）校讎の校とは、くらべるという意味が含まれていて、校訂、校合、校定、校正などと、一般に広く使われている。

写本の時代にあっては、書き誤り、印刷本でも校正ミスが生じてくる。そこで諸本を集めて、文字の異同を調べ、原本への復元をはかるときに、独りひとりが、各自それぞれに異本をもって差し向い、討論しながら原本へ近付けようとするさまが、あたかも仇讎（あだうち）のようにみえるところから、中国では、このように、実にふさわしい名称が付けられた。

やがて、校讎学といわれる独立した学問が生まれ、また、校勘学とも別称されている。

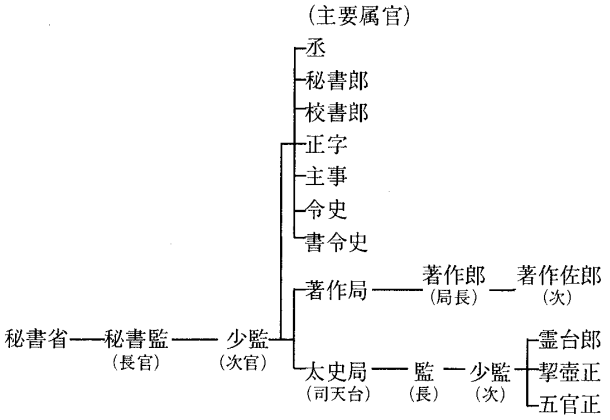
〔参照〕

ａ．銭亜新；『鄭樵校讎略研究』 上海 商務印書館（1948）118Ｐ．

ｂ．蔣元卿；『校讎学史』 台湾 商務印書館（人人文庫本）（1969）312Ｐ．

4）讖緯学は前漢時代に起こり、後漢に隆盛を極めた２つの学問。讖学は、未来の験（むくい）を予知する学問であり、緯学とは、経学に対し、その闕を補う学問で、主として天に関することを説く。

5）現代からながめた秘書省の組織、ないしは職官制度を、日中民族科学研究所編『中国歴代職官辞典』 国書刊行会（1980）Ｐ．400により参照すると



6）底柱とは、山西省平陸県の東、南は河南省陝県との境にある地名、砥柱とも書く。

7）『唐書』巻198 欧陽詢伝

8）『げいもんるいじゅう』は、早くからわが国に伝わり、『日本国見在書目録』にも登載されている。ついては虞世南の『北堂書鈔』に次ぐ古い著作で、後述する『初学記』などとともに、唐人が編集した現存する貴重な類書。これら類書の適格な評価については、次の図書を参照されたい。

劉国鈞 鄭如斯共著 松見弘道訳『中国書物物語』創林社（1983）ＰＰ．98－99

9）（隠太子）『唐書』巻79 高祖諸子列伝第４

10）『唐書』巻105 褚遂良伝

11）『唐書』巻198 孔穎達伝（挿絵参照）

12）『唐書』巻102 虞世南伝（挿絵参照）

13）『唐書』巻198 顔師古伝（挿絵参照）

14)『唐書』巻132　呉兢伝
15)『唐書』巻153　顔真卿伝（挿絵参照）
16) 唐代玄宗のころは、写本の全盛時代で、これぞまさしく、こんにちに残る著名な逸話の一つといってもよい。続いてその他、写字生・写経生などのことも含めて、中国、引いては、わが国における図書の歴史を回顧するに際しては、唐朝の時代的風潮を次の著書で、興趣をもって参考にしたい。
劉国鈞著　松見弘道訳『図書の歴史と中国』増訂第２版　理想社　(1980)　ＰＰ．81－93
17)『唐書』巻202　李善伝
18) 中国における伝統的分類法である七分法の始まりは、劉歆（りゅうきん・53ＢＣ －ＡＤ23）の『七略』であるが、『七志』は、それに続く分類法。
ちなみに、『七略』より遅れること400年あまりに出た王倹（452－480）の『七志』は、①経典志（六経、小学、史記、雑伝）　②諸子志（今古諸子）　③文翰志（詩賦）　④軍書志（兵書）　⑤陰陽志（陰陽及図緯）　⑥術芸志（方伎）　⑦図譜志（地域及図書）の７大類より成っている。この問題のいきさつは、次を参照。
ａ．王重民；『七志與七録』　香港　龍門書店『中国図書史資料集』所収　(1974)　ＰＰ．283－298（『七録』は、阮孝緒（479－536）の編）
ｂ．倪暁建；『劉向、劉歆與別録、七略』　武漢大学図書館学部　図書情報知識　(1980)　Ｎｏ．１　ＰＰ．50－52
ｃ．児玉孝乃　山内弘江　松見弘道；『ＤＣ，ＥＣ，ないしはＬＣの東漸と、漢籍分類法をめぐる確執』　東海女子短期大学紀要　11号　(1985)　ＰＰ．102－104
追って、王倹の伝記については、『南斉書』巻23、『南史』巻22
19)『唐書』巻199　尹知章伝
20)『唐書』巻132　韋述伝
21)『唐書』巻199　母煚伝
22)『唐書』巻199　田可封伝
23)『唐書』巻200　康子元伝
24)『唐書』巻200　盧僎伝
25)『唐書』巻200　陸去泰伝
26)『唐書』巻200　徐楚璧伝
27)『唐書』巻199　殷承業伝
28)『唐書』巻121　王毛仲伝
29)『唐書』巻199　殷践猷伝
30)『唐書』巻199　王愜伝
31)『唐書』巻199　劉彦直伝
32)『唐書』巻199　王湾伝
33)『唐書』巻199　劉仲丘伝
34) 注18）参照
35)『漢書芸文志』については、注２）の著作Ｐ．141，Ｐ.150，Ｐ.155　参照
36) 経律論疏とは、仏の戒律や、議論、注釈
37) 経戒符籙とは、仏の戒めや、未来を予言した書き物
38)『唐書』巻125　張説伝
39) 中国では、古くは漢代より宗教目録の編集に着眼されていたが、ここでは天主教とキリスト教、および道蔵目録に関しては、さておきたい。
そこで仏教目録のみについていえば、以下のごとく、例えば姚名達は、魏の朱士行の『漢録』はじめ、西晉の笠法護の『衆経目』、聶道真（しょうどうしん）の『衆経目録』など、その後、約1,200年間に編集された目録77点(内､23点が現存)を挙げている。
なかでも玄宗は、こうした分野にまで力こぶを入れていた実状について、筆者らは執筆しながら敬服するばかりである。
そのあらわれの金字塔は、ここに挙げた西京崇福寺の沙門である釈智昇が編集した各種の目録であり、前掲の如く、母煚の業績として挙げた『開元内外経録』であるといえよう。詳しくは、次の文献にゆずることとする。
ａ．姚名達；『中国目録学史』　台湾　商務印書館　(1973)　ＰＰ.227－326
ｂ．鄭鶴声　鄭鶴春；『中国文献学概要』　上海　商務印書館　(1939)　ＰＰ．141－150

Summary

A Historical Look at the Emperor Xuan Zong's (玄宗) Library Administration: With special mention of Chief secretary of the Monastic Library, Abeno Nakamaro (阿部仲麻呂) and his friendships with the Chinese and Japanese Literati (Part 1)

Takano Kodana and Hiromichi Matsumi

Looking back over the history of books and libraries in the East and West, it can safely be said that the loss of books through the years due to natural disasters, mishandling, political uprising, etc. surpasses anything we might imagine.

The case of China, which we will address here, is no exception; it's not too much to say that the history of the written word in China over the past 3,000 years is a continuous cycle of the collection and disappearance of books and manuscripts.

The era of Shen-tang, a dynasty reigned by the uncommonly benevolent Xuan Zong (玄宗) ,was among the most flourishing periods in the histoty of China in every respect - politically, economically, diplomatically, and culturally. Following the exammple of the emperors of the Chu-tang period, Shen-tang, with the assistance of the chief secretary of the Monastic Library, devoted himself to the collection, classification adn cataloguing of library materials, which corresponds to what we refer to today as "library administration". In what follows as part one of this paper, we will introduce portions of several chronicles which we hane uncobered in our research, which were recorded more than 1,000 years ago.

Abeno Nakamaro (阿部仲麻呂) , referred to in the subtitle, was sent to China as an envoy in 717, during the Tung dynasty. Being young and intelligent, he chose to take a special course which enabled him to become a civil officer there. Thereafter, he was promoted by Emperer Xuan Zong to the position of chief secretary of the Monastic Library, in which capacity he made monumantal contributions to library administration in China. During that time, he formed close friendships with such famous poets of the Tang dynasty as Li Bai (李白) ,Wang Wei (王維) ,Chu Guang-xi (儲光羲) ,Bao Ji (包佶) and Du Fu (杜甫) .In addition, he cultivated warm friendships with Kibino Makibi (吉備真備) , a colleague who accompanied him to China from Japan, and with the Japanese Buddhist priest Gen Bo (玄昉) .
His was a very full and artistic life. We will take up his story as Part 2 of this paper.

(司書，司書教諭課程・図書館学)